

羽黒のコートハウス



「楽園」な家

アジアンリゾートに絶対不可欠な要素のひとつは、「プライベートな空間が、ありえない美しさの環境と一体化している事」だと実感しています。そこは、海であったり、庭であったり、時には牛のほすエキゾチックな棚田の風景がもしません。まさに「楽園」と呼ぶにふさわしい場所です。海・空・緑・花・動物・鳥等々。自然はもともと人を癒す力を持っています。また、リラックスできる空間は、その力を授け止めやすい状態に保っているのでしょう。

日常生活で「癒し」の源の基本を「いえ」と考えるなら、それらのエッセンスを送込むことには、意味があるはずです。非日常の空間とは少し違った解きであっても、そうやってつくりあげた「素でいられるいえ」は、自分たちにとって、かけがえのない「楽園」に熟成されていく可能性を持っています。

思いきって帰ってしまおう

だいぶ大仰な話になってしまいましたが、結局この計画で一番大切なのは、「過度にプライバシーの保たれた綺麗な屋外空間」って事じゃないでしょうか。それを、この敷地条件にどうあてはめていくかが課題で、「リビングは、その一面に屋根を架ける」という感じがいいはず。

消去法でいくと、まず、はっきりしているのは、両側隣家の壁を眺めていても癒されないと言う事。それから、東側の山並を取り切るような狙いは、将来的なリスクが高いので、それなら、思いきって帰ってしまっって、中庭形式はいいでしょう。敷地は広いので、ちょうどいい広さが確保できそうです。

「適度」なプライバシー

4方を囲って完全な中庭にすればプライバシーの確保は完璧です。しかし、カッチとしてはあまりすぎた空間は、どことなく軽妙なもので、「癒し」の効果が半減してしまいます。そこで今回は、3方を囲ったうえで、東側を道路に對してややオープンな計画としました。その際、庭とそれに連なるリビング等の主要な空間は、地盤を半層分持ち上げて、道路面から独立させ、適度なプライバシーが保てるように考慮しています。

設計意図

旧市街地からバイパスをへたてて外側のエリア、古くからの小さな集落の一角にある敷地は、道路からの強いメッセージは感じられないものの、正方形に近い形状を持ち、三方を道路・田舎に囲まれた見通しのきくロケーションである。しかし敷地には隣家が近接しており、プライバシー保護の要請が十分かつ経済的な計画とした。その敷地環境の特殊性を避ける意味で、採光・通風・眺望などを考慮して遠くの小山が望める東側を開放。併せて中庭の山を半層分持ち上げることでコートとしての独立性を確保している。

内部空間は、この地に建てる家族室を中心に展開される。スキップする床と斜配天井のありさま、壁に落ちるトップライトの光に導かれて、変化しながら連続していく。そのつなぐたては変化する外部の光とつながる。開けた三方をそれぞれからの風を呼ぶことで全体的な開放感が決定された。車道に隣りながら中庭の静寂に包まれる。

